

編集後記

『哲学の探求』第32号が完成いたしました。今号では様々な工夫を施してより見やすい誌面をめざしました。お手にとられた『探求』にその成果があらわれていることを願っております。

今年度の『探求』は、昨夏のテーマレクチャー「魂の教育は可能か」でお話し頂いた田島正樹先生と納富信留先生、また7人の個人研究発表者の方々からご寄稿いただき、充実した魅力的な内容に仕上がりました。さらに、来年度のレクチャーをお引き受けくださった先生方の講演要旨も掲載しております。こちら是非ご覧ください。完成にいたるまで多くの方々にお力添えいただきました。ありがとうございます。とりわけ、お忙しいなかご寄稿くださいました執筆者の皆様、また編集作業をご支援くださった皆様に心よりお礼申し上げます。

(涉外 北野 安寿子)

なぜ出版するのか。俄編集担当が前任者そして慣習を引き継いだけと言い逃れたところで、このメタレベルの問いは到底回避できないものであった。がんらい経済的利益を目指した雑誌ではないから、産業の問題に還元されるものでもない。業績を積むのなら学会誌や紀要に場を求めることができるし、現在ではネット上に文章を公開することすら容易だ。

にもかかわらず、『探求』はこうして確かに第32号を発行する。もちろん、このことは何を措いてもテーマレクチャーおよび個人研究発表の投稿者各氏、そして本書を手にとられる読者の方々に負うものである。2本のレクチャー論文、そして7本に及んだ個人研究発表論文のそれぞれが、冒頭の問いを軽々と飛び越えた思考の営為の実践となっており、それが本書を繙読される奇特な方々にはおのずと伝わってゆくものであることには疑いを俟たない。したがって冒頭の問いは、執筆者・本書・読者という絶えざる不可視なネットワークの空隙に、畢竟腰くだけとなって霧消してゆく定めだったのである。

編集者としての最低限の倫理として、誤植がないこと、そして読みやすいレイアウトを目指した。しかし所詮は素人仕事、不備がなお多々あることを懼れる。読者の皆様のご寛恕を請うとともに、不備にお気づきの際はどんなことでもご指摘を賜りたい次第です。

(編集 三河 隆之)